

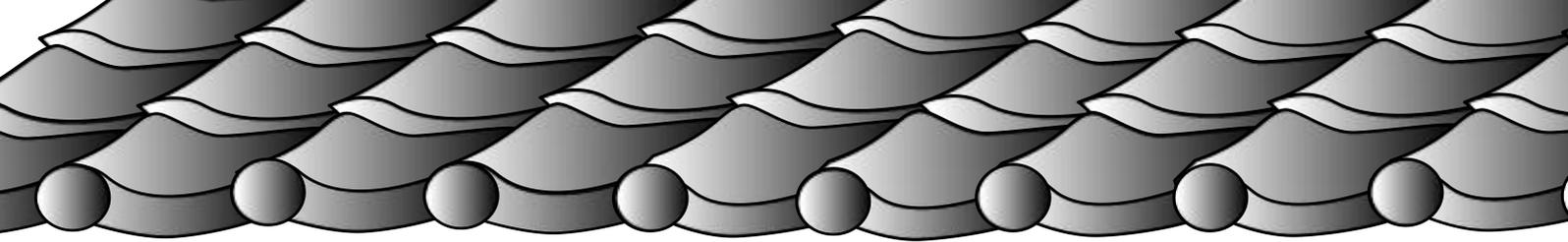
令和7年度小企画展示

# 瓦から見る市内の文化財 — 中山道を中心に —



島村老茶舗 軒先

家の屋根に葺かれている「瓦」。日本家屋にはおなじみのものですが、間近で見る機会は少ないと思います。今回の小企画展示では、伝統的な日本の古い建物を多角的に観察する上で重要な瓦に着目します。



## はじめに

家の屋根に葺かれている「瓦」。日本家屋にはおなじみのものですが、この瓦葺屋根が奨励されはじめたのは江戸時代享保期(1720年頃)のことです。なぜ、このような屋根が奨励されたのかを調べてみると、それは防火対策の一つであったという一面が見えてきます。

火は、暖を取ったり調理をしたりと、生活になくってはならない一方で、火災を引き起こす原因にもなります。日本で発達した木造建物は、高温多湿な環境に適している一方、非常に燃えやすいという欠点があるのです。

江戸の町は木造建物が密集しており、ひとたび火事が起こると、次々と延焼し大火災になることがしばしばありました。こうした事態への防火対策の一つとして、降ってくる火の粉から火災になる事を防ぐために瓦があったのです。

今回の展示では、市内に所在する伝統的な日本の古い建物を多角的に観察する上で重要な瓦に着目します。



軒棧瓦 (のきさんがわら)

軒先に葺かれている瓦の様子。よく見ると瓦の下に粘土が見える。瓦を葺く際に屋根と瓦の間に少量の粘土を使い、瓦同士が綺麗に安定して並びように用いられている。



鬼瓦 (おにがわら)

(個人蔵)

屋根の端や棟の隅などに葺かれた瓦。雲の形をしている事から雲鬼(くもおに)という種類の鬼瓦。

## 瓦の歴史と桶川の瓦職人

瓦が日本の歴史に現れるのは、仏教が伝来した6世紀頃とされています。当初は一般の家屋に広く普及するものではなく、寺院や役所などの限られた建物に使われていました。その後、城や武家屋敷などにも用いられます。

一般的に普及するのは、明治期に入ってからです。その頃になると、全国各地に瓦の産地ができてきます。埼玉県内では深谷・児玉地方が、古くから全国的に知られた産地でした。

桶川市内にも明治期から瓦職人がいたことが分かっており、昭和2年(1927)に刊行された『にほんかわらぎょうそうらん日本瓦業總覽』によれば、かのうむらごちょうだい加納村五町台や同村のこぼりりょうけ小針領家で瓦が製造されていました。

現在、桶川で瓦を焼いている職人はいなくなりましたが、瓦職人が使っていた数多くの道具が、桶川市歴史民俗資料館に残されています。



ミガキカタ

(当館蔵)

粘土を瓦の形に整える道具。使用する際には、底部に空いている穴に棒を差し込み、棒は石の台(ミガキカタダイ)で固定して使う。ミガキカタを自由に回転させながら、余分な土をそぎ落とし、タタキ棒と言われる平らな板で上から叩いて、形を整える。



カワラのケン

(当館蔵)

瓦に文様をつける道具。ミガキカタの上で形を整えた瓦にケンを押し当て、文様をつける。

## 資料紹介 ～市内の瓦職人について～

### 埼玉縣北足立郡事一班（さいたまけんきたあだちぐんじいっばん）

当時の北足立郡地域の情報（学校や農業、商工業など）について、統計的にまとめられた冊子です。初版は明治42年（1909）に発行されており、明治の終わりごろには、加納村に3軒の瓦屋があったことが分かります。また、巻末の広告からは、3軒のうち1軒が松岡元五郎だと分かります。

町村名	戸製 敷造	敷 量	價 格
土合	三戸	七、五〇〇 <small>枚</small>	一、二七〇 <small>圓</small>
青木	二	一〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇
南柳	二	一〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇
新郷	二	一〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇
小針	六	一、二〇〇、〇〇〇	三、四七〇
小室	一	三、三三〇	三、三三〇
加納	三	九〇、〇〇〇	一、八〇〇
馬宮	一	三〇、〇〇〇	六〇〇
平方	一	六、五〇〇	一、二〇〇
春岡	一	六、〇〇〇	一、二五〇

瓦各種製造販賣

埼玉縣北足立郡加納村  
大字五丁台十二番地

**松岡元五郎**

### 埼玉縣北足立郡事一班（さいたまけんきたあだちぐんじいっばん）

（昭和58年（1983）復刻版より抜粋 傍線部は加筆）（当館蔵）

右表は、『日本瓦業總覽』に掲載されている大正15年時の瓦製造者について、桶川市内の地域を抜粋したもの。

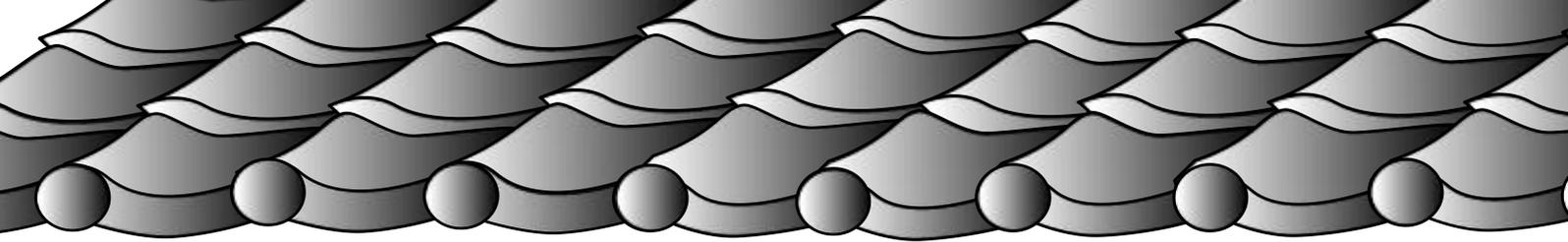
明治42年（1909）に3軒だった瓦屋が8軒に増えている。五町台と小針領家は隣接しているため、この場所に瓦製造者が集まっていたことが分かる。

（※表中の「濱谷丑三郎」は、「渋谷丑三郎」と表記されている資料もある。）

氏名	住所
埼玉瓦土管（株）	加納村
廿樂 政吉	加納村 五町台
川邊 定次郎	加納村 五町台
栗原 サク	加納村 五町台
濱谷 丑三郎	加納村 五町台
松岡 鋼太郎	加納村 五町台
榎本 伊之助	加納村 五町台
渡邊 勝蔵	加納村 小針領家

（表）大正15年（1926）における桶川市の瓦製造者

（『日本瓦業總覽』を基に作成）



## 瓦の紹介

瓦の中には、平たい瓦や丸い瓦の他に、鬼の顔をした瓦や鯨しやちほこの形に作られたものがあります。また、軒先に葺かれる瓦には巴文ともえもん（)などの文様がつけられた瓦もあります。これらを総じて「役瓦やくがわら」と呼びます。「鬼」には魔除け、「鯨」や「巴」には火災除けの意味が込められています。

### ●鬼瓦（おにがわら）

屋根の棟先むねさきなどには鬼の顔をした瓦がつけられています。悪いものを追い払う辟邪へきじゃの意味で使われていました。古くから寺院などでよく見られていましたが、時代が新しくなるにつれ、菊の文様や屋号やごうを入れるなど、様々な種類の鬼瓦が作られました。鬼の顔をしていなくても「鬼瓦」と呼んでいます。



鬼瓦（個人蔵）

### ●平瓦（ひらがわら）

平たい瓦です。この後紹介する丸瓦とともに、古くから寺院などに葺かれています。



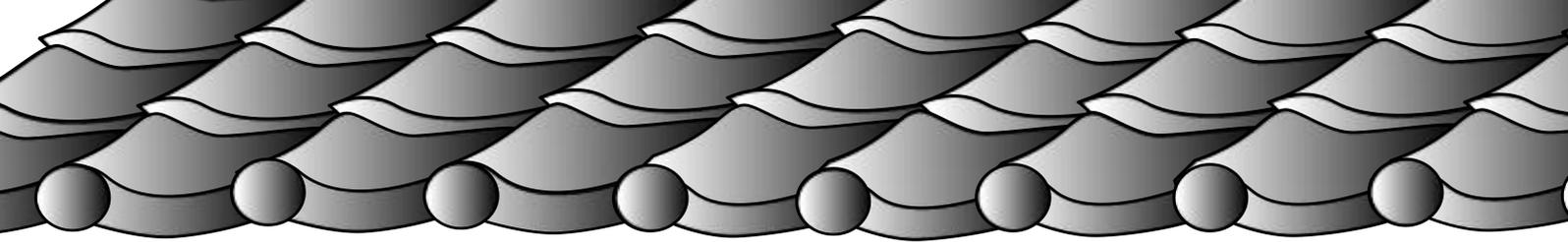
平瓦（当館蔵）

### ●軒平瓦（のきひらがわら）

軒先に葺かれた平瓦の事です。草花を模した文様などがつけられます。右写真の瓦の文様は植物をモチーフにしたもので、唐草文からくさもんと呼ばれます。



軒平瓦（当館蔵）



### ●丸瓦（まるがわら）

平瓦に対して、丸い形をした瓦です。古くから寺院などで葺かれています。

平瓦と丸瓦で構成された屋根を本瓦葺き屋根ほんがわらぶきと言います。

### ●軒丸瓦（のきまるがわら）

軒先に葺かれた丸瓦の事です。巴文という文様のほか、家の屋号や家紋などを入れている例が見られます。古いお寺では、蓮の花を模した文様が使われています。

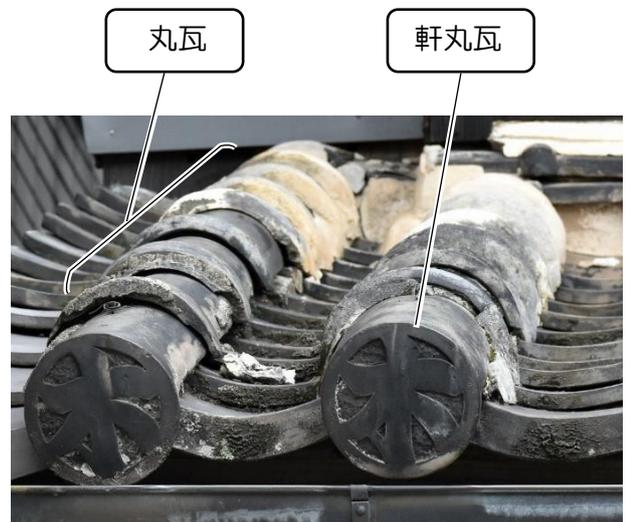
軒丸瓦は、その形状が馬具の「あぶみ鐙」に似ているところから「あぶみがわら鐙瓦」とも呼ばれています。

### ●棧瓦（さんがわら）

江戸時代に開発された瓦です。丸瓦と平瓦をくっつけたような波うった形をしています。

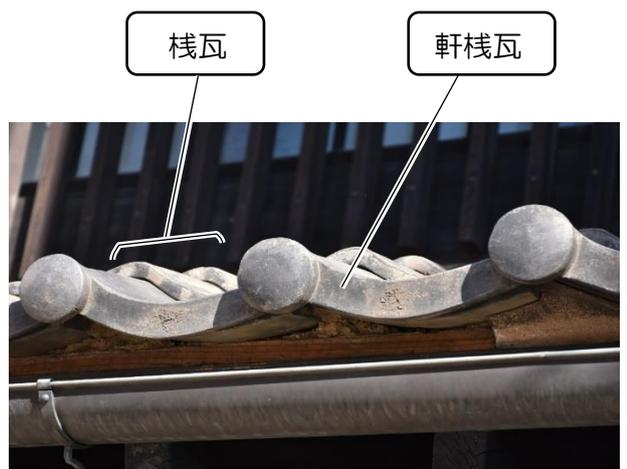
### ●軒棧瓦（のきさんがわら）

軒先に葺かれた棧瓦の事です。唐草文をいれたものもあります。唐草文には、生産された地域ごとに違いがみられます。



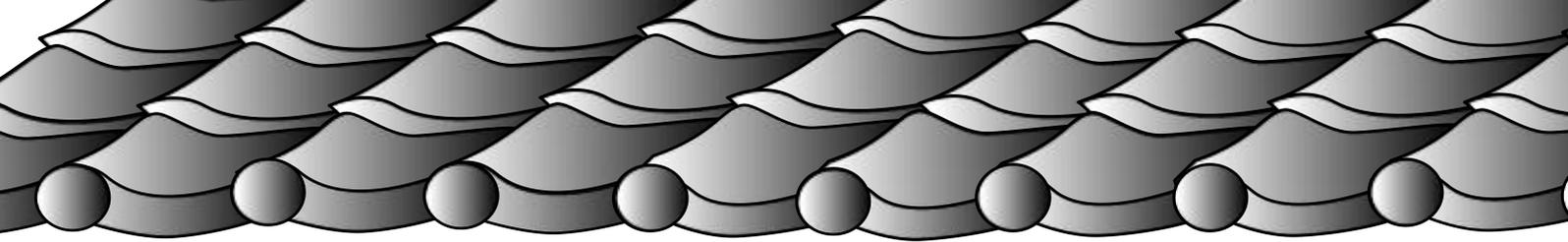
丸瓦と軒丸瓦

軒丸瓦の後ろには丸瓦が葺かれる。



棧瓦と軒棧瓦

軒棧瓦の後ろに棧瓦が葺かれる。



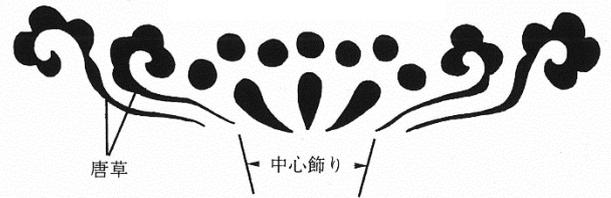
## 唐草文について

都内(江戸城周辺)の発掘調査では、江戸時代の瓦の分類が行われています。例えば、軒棧瓦にあしらわれている唐草文に着目した分類では、江戸城周辺でよく見られる「江戸式」の他に、静岡県などの東海地域で見られる「東海式」、関西地域でよく見られる「関西式」などに分けられています。

展示資料の中には、江戸式が1点あります。他の瓦はすべて東海式に見えますが、東海式と全く同じではなく、江戸式や関西式の唐草文にある「子葉<sup>しやう</sup>」と思われる文様が見られることから、これらは東海式と江戸式(または、関西式)の折衷<sup>せっちゆう</sup>様式ではないかという考えがあります。



江戸式の唐草文

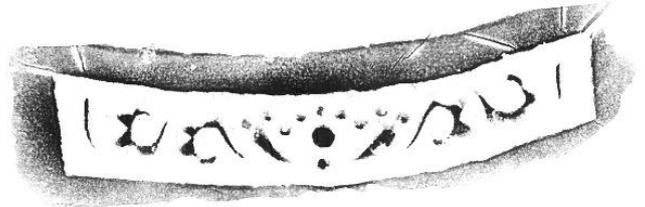


東海式の唐草文

(金子智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」より抜粋、加筆)



江戸式の唐草文がつけられた軒棧瓦  
(桶川宿本陣遺構出土)



東海式の唐草文に「子葉」が  
つけられた軒棧瓦  
(島村老茶舗店舗の瓦)

## 埼玉県指定文化財

### おけがわしゆくほんじんいこう 桶川宿本陣遺構

本陣は、江戸時代に大名や幕府の役人などが宿泊、休憩する施設として設置されました。桶川宿に本陣が置かれたのは、寛永年間頃（1624～1644）と言われています。文久元年（1861）の皇女和宮下向の際には、和宮が宿泊したことも知られています。

どこの宿場にも本陣が必ず置かれていましたが、埼玉県内の中山道では、桶川宿本陣が唯一現存している本陣です。本陣建物のうち上段の間、湯殿、厠などが残されています。

## 瓦の再利用 ～本陣から出土した瓦～

今回展示した瓦の中には、地中から出てきた瓦があります。これは、本陣遺構を後世へ伝えるため、昭和60年から61年にかけて行われた修理工事の際に見つかったものです。建物の基礎に再利用されたものと考えられます。瓦を三層に敷き詰め、上から突き固められていました。建物が沈まないように丁寧な地業がされていたことが分かります。出土箇所の建物は、寛政年間（1789～1801）に建て直されている事から、それより前に本陣に葺かれていた瓦である可能性があります。

出土した瓦は摩耗しているものや破片になっているものが多くありましたが、それらを接合することで、文様や形状が分かりました。



瓦を3層に敷き詰めた様子

桶川宿本陣の修理工事の際に、瓦を再利用した地業の跡が見つかった。



再利用され摩耗した軒平瓦（当館蔵）  
巴文と唐草文がつけられている。

## 国登録有形文化財

### しまむらろうちゃほてんぼけんおもや 島村老茶舗店舗兼主屋

島村老茶舗は、嘉永7年(1854)に創業した商家です。初代の木嶋屋七兵衛は、木嶋屋の総本家木嶋屋源右衛門の次男として生まれました。商才が見込まれた七兵衛は本家より分家独立し、現在地に店を構え、「マルキ」(⊕)の屋号を名乗りました。創業当時から今日まで茶業を営み、その歴史は170年を超えます。また、かつてはお茶のほかに、紅花や紙、塩などを扱っていました。



中山道に面して店舗があり、その奥に主屋があります。このつくりは、江戸時代の土地利用によくみられる形態で、間口は狭く、奥に続く住居部分が長くなっています。嘉永7年に建てられて以降、店舗部分は大正15年(1926)に建て直されました。屋根には屋号の「⊕」をあしらった瓦を見ることができます。



鬼瓦 (おにがわら)



軒丸瓦 (のきまるがわら) (個人蔵)

両者とも島村老茶舗の瓦。屋号を示す「マルキ」=⊕があしらわれている。丸瓦の後ろに見えるのは銅線と銅釘で、瓦を固定する際に使われていた。現在葺かれている軒丸瓦と同じ形をしている。瓦に屋号を入れる事で建物をより立派に見せる効果がある。

## 字が刻まれた瓦 ～刻印瓦の謎～

瓦の中には、文字が刻まれた瓦もあります。これは作った職人の名前や瓦が葺かれた年を示したものです。桶川市寿にある島村老茶舗の瓦や、桶川市坂田にある<sup>しゅげんどう</sup>修験道の寺、<sup>ほんがくいん</sup>本学院の瓦には「喜」の文字が刻まれたものがあります。これは瓦を焼いた窯を示す「<sup>かま</sup>窯<sup>かまじるし</sup>印」ではないかと考えられます。しかし、現時点ではどの地域で焼かれた瓦なのか定かではありません。同じ「喜」の刻印を持つ瓦は、<sup>いわつきじょう</sup>岩槻城（さいたま市岩槻区）とその周辺からも発見されています。

瓦に刻まれた特徴を細かく見てみると、瓦の流通や地域間のつながりなど、当時の社会の一端も見えてきます。



軒棧瓦（島村老茶舗）（個人蔵）  
矢印部に刻印がある。

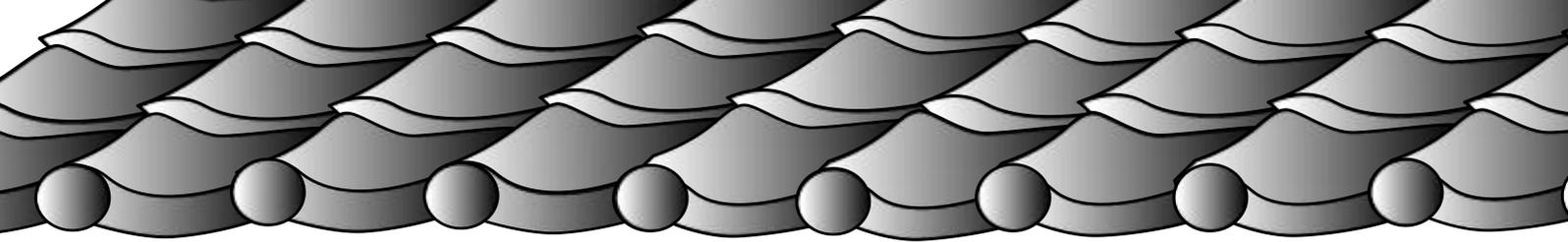


### 刻印の拓本（拡大）

上が島村老茶舗、下が本学院の瓦の刻印。同じ「喜」という刻印だが、字体は異なっている。同じ窯印だとすると、字体の違いによって瓦が焼かれたおおよその年代が分かる場合もある。



軒棧瓦（本学院）（当館蔵）  
矢印部に刻印がある。



## おわりに

今回の小企画展示では、中山道の建物にかつて葺かれていた瓦を紹介しました。瓦には、周辺火災からの延焼リスクを減らすことや、屋号を入れたものを葺くことで、建物の<sup>いししょうせい</sup>意匠性を上げるなど、日本家屋ならではの意味があることが分かりました。

ぜひ現地にも赴いていただき、江戸時代から続く中山道と昔ながらの趣を残した建物を見ていただけたらと思います。

(主要参考書籍)

井上要 (編) 1927 年『日本瓦業総覧』

上原真人 1997 年 歴史発掘 11『瓦を読む』講談社

桶川市 1990 年『桶川市史通史編』

桶川市教育委員会 1988 年「埼玉県指定文化財 桶川宿本陣遺構 復原管理工事報告書」桶川市文化財調査報告書第 18 集

金子智 1996 年「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』101 早稲田大学考古学会

埼玉県岩槻市教育委員会 2004 年「岩槻城関連遺跡群発掘調査報告書 3」岩槻市文化財調査報告書第 25 集

埼玉県立民俗文化センター 1986 年『埼玉のかわら』埼玉県民俗工芸調査報告書第 4 集

埼玉県立民俗文化センター 1989 年『映像記録 埼玉の瓦職人』

第 66 回埋蔵文化財研究集会事務局 2017 年『幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—』第 66 回埋蔵文化財研究集会

展示協力者一覧 (敬称略・順不同)

埼玉県立歴史と民俗の博物館 さいたま市教育委員会 島村老茶舗 羽生市立郷土資料館

川邊絢一郎 島村 等 元林恵子 山崎吉弘 吉岡卓真

- 1 本書は、令和8年2月10日（火）から3月22日（日）まで開催する、令和7年度小企画展示「瓦から見る市内の文化財－中山道を中心に－」の展示図録です。
- 2 本展示及び図録は桶川市歴史民俗資料館の犬竹智裕が企画・構成し、歴史民俗資料館職員が補佐しました。
- 3 資料の展示順序と図録の掲載順序は異なります。また、図録に掲載していない展示資料、展示していない図録掲載資料もあります。
- 4 展示資料及び図録掲載資料の無断転載はおやめください。

令和7年度小企画展示「瓦から見る市内の文化財－中山道を中心に－」

発行日 令和8年2月10日

編集・発行 桶川市歴史民俗資料館

〒363-0027

埼玉県桶川市川田谷 4405-4

電話 048-786-4030

印刷 桶川市歴史民俗資料館